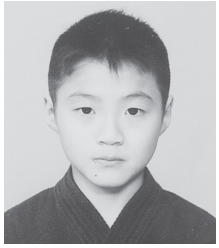
『剣道のすゝめ』



京都府
京都尚武館
小学５年　　森　　天　秀

「先鋒森天秀」全国大会のメンバーに僕の名前が呼ばれました。嬉しい気持ち、安堵の気持ち、不安な気持ちが入り混じり複雑な気持ちになりました。その理由は、去年の夏から勝てなくなった事、後から剣道を始めた同級生がめきめき強くなり力をつけてきたことから自分に自信が無くなったからです。試合で負けると涙がこぼれ落ちます。この涙は見せたくないのに、どんどん涙が溢れてきて、仲間の試合すら滲んで見えなくなります。

先に剣道を習い始めていた兄について、道場に行っているうちに、いつのまにか自分の身長より長い竹刀を振り回し、始めていた剣道。「学校で剣道している子もいないし、身体の小さい僕なんか稽古しても勝てへん、剣道なんかもうやりたくない。」勝てない自分への言い訳ばかりをしていました。でも、全部取り消します。そんな甘えた事を言って逃げている場合ではなくなりました。六年生は、必死に稽古しています。なんとかついて行かなければ、どうしたら勝てるのか、一番聞きたくない兄に聞いてみました。

「36になって竹刀が振れてない、素振りー。」と言われ、頭に来た僕は、必死で素振りをしましたが、それでも錬成会、部内戦でも勝てませんでした。それを見ていた兄は、「後ろの六年信用してないの？今の天秀は、勝負してない、後は自分で考えな。」と言いました。僕は、負けるのが怖くて間合いを詰められない、持ち味の足も止まる、勝たなければと気負いすぎて自分の剣道が出来なくなっていました。そうか、僕が勝たなければいけない相手は弱気の僕自身、今、諦めたら絶対に後悔する。僕が僕を信じられるように、涙を拭いて一歩二歩と前に進もう、絶対に諦めないと決心したのに、全国大会の京都予選までのカウントダウンが始まった頃、僕には、また試練が起こりました。それは、ずっと小学生団体について下さっていた先生が、お仕事の都合で全国予選当日、京都におられないということでした。京都を発たれるギリギリまで、僕達に稽古をつけて下さり、「一年前より、冬より強くなっている、自分達のやれる事を全部出し切りなさい。絶対勝てる。先生とお前らの武道館の切符を勝ち取ってこい。」と言ってお仕事に行かれました。

全国大会京都府予選会の前日に、八幡の守り神石清水八幡宮に必勝祈願のお参りをし、みんなで引いたおみくじは、「末吉」願望、待てば叶うでしょう。正直、微妙な空気が流れましたが、その空気を断ち切るように、大将の六年生が「八幡さんも叶うって言うてはるで、先生と武道館行くぞ。」とメンバーに言ったこの言葉が、僕たちの心の合言葉でした。予選当日、やはり、僕は、緊張しましたが、ここで負けられない、絶対勝って後ろに繋ぐ、最後の一秒まで勝負してやる、何度も自分に言い聞かせ自分の心から緊張とプレッシャーを消しました。そして、僕達は予選に勝ち、先生と僕達の武道館への切符を掴み取ることが出来ました。後日、先生から、「先生の夢を叶えてくれてありがとう。」と思いがけない言葉を頂いた時、嬉しくて笑顔のはずなのに涙がこぼれそうになり天を仰ぎました。

先生と最高の仲間と武道館で試合出来た事は、最高の宝物です。僕はこの最高の夏を忘れません。そして、開会式で暗転からパッとライトが点いた時の胸が震えるような感動を仲間と再び味わう為に、来年は僕が仲間を引っ張り、自分達の手で武道館に必ず戻って来ます。

僕は、学校で友達から「剣道って何？」と聞かれます。残念ながら、帰国子女の友達には、馴染みが無いようです。今までは、きちんと説明していませんでした。でも、これからは自信を持って、「剣道は、厳しい稽古をするから、心身共に自分が強くなれるし、最高の友達も出来る、僕の全てをかけて頑張っている剣道、君にも君だけの最高の宝物を手にすることが出来るから、一緒にやってみよう。」と答えます。今の僕は剣道が大好きだ。